令和６年度 日本大学文理学部付置研究所　所員個人研究費　研究実績報告書

所属・資格　　ドイツ文学科・教授

申請者氏名　　保阪　靖人

<table>
<tr><td colspan="2">研　究　課　題</td><td>複合動詞形成並びに項の左方移動に関する研究</td></tr>
<tr><td rowspan="3">報告の概要</td><td>研究目的および研究概要</td><td>ドイツ語には、左文枠における複合動詞形成があり、すでに Evers（1975）が提案し、Hosaka(1984)などでそれがさらに階層性を持っていることを指摘している。そのために動詞の項は動詞の内項から外項となり、従って中域内のスクランブリングが可能になると考えられてきている。ただし、スクランブリングはトピック位置（左方エッジ）との関係があるが、それについては詳細に論じられているとはいえない。令和 6 年度はこの関係について研究するとともに、従来から行っている映画の音声コーパス（1 年に日本ずつ行っており、すでに 60 本を超えている）を継続し、この言語コーパスに基づいた研究の成果を出したいとも考えている。</td></tr>
<tr><td>研究の結果</td><td>左方移動、特に疑問詞の長距離移動に絞って今回は研究を進めた。埋め込み文からの疑問詞の移動は様々な言語に見られるが、ドイツ語、英語、イタリア語に絞ってその振る舞いを観察すると、ドイツ語に関してはその移動の制約が厳しいことが明らかとなった。本年度に作成した映画コーパスなどを用いて、ドイツ語から英語、イタリア語への翻訳、並びに英語からドイツ語への翻訳を調べることでも実際には埋め込み文からの疑問詞の移動はドイツ語では一番制約が強く、そのために英語の who do you think that John met? 対応する文は、was glaubst du, wen Hans gesehen hat? のような特殊な構文となる。つまり、本来文頭に移動すべき wen が文頭には移動せず、その代わりに疑問のスコープ・マーカーとなっている。</td></tr>
<tr><td>研究の考察・反省</td><td>今回は複合動詞形成についての研究に時間を割くことができなかった。今回明らかにしてきた疑問のスコープ・マーカーのみを文頭に上げる特殊な構文はドイツ語と言語的に近いと言われる言語ではほとんど見られない。ではなぜドイツ語の副文が移動の島として機能するようになったのかについては明確な説明をする必要がある。今後はそのことについてさらに検討を進めたい。</td></tr>
<tr><td colspan="2">研究発表
学会名
発表テーマ
年月日／場所

研究成果物
テーマ
誌名
巻・号
発行年月日
発行所・者</td><td>※この欄は，本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。
研究発表
日本独文学会関東支部研究発表会
「ドイツ語における疑問詞の長距離移動について：移動の障壁（島）について」
2024 年 11 月 24 日／早稲田大学早稲田キャンパス　11 号館 503 教室</td></tr>
</table>